

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	鈴木 剛志	指導教員 (主査)	高橋 稔

論文題目	専門学校生の学業継続要因の検討—在学者と退学者の比較—
------	-----------------------------

本文概要

【問題と目的】 専門学校は高校卒業以降の進学先として4年制大学に次ぐ進学率を有しており在籍者数は約58万人を超える。(文部科学省, 2017)。しかし, 専門学校は専門職人材を養成する高等教育機関としての社会的役割を担う一方で, 高い中途退学率が指摘されている。「専修学校における生徒・学生支援等に対する基礎調査研究委員会(2014)」は私立の専門学校全分野では, 年間7%程度の学生が中途退学するとしているが, 推定すると毎年4万人強が中途退学に至っていることになる。この数は社会的インパクトが大きく, 専門学校の中途退学は喫緊の問題として調査研究することが求められる。しかしながら専門学校領域における退学研究や学校適応研究は非常に少なく研究が進んでいるとは言えない現状にある。そこで本研究は質問紙調査によって専門学校生の退学者と在学者の特性を比較して専門学校領域における学業継続要因を究明することを目的とする。

【方法】 調査対象者は, 全国9地域8分野68校に在籍する専門学校生第1学年男女合計11,247名である。使用した尺度は「学業継続要因尺度」で先行研究の質問項目を引用し一部修正して, 学校継続のための心理的サポートに必要と思われる独自のモデル8因子構造で構築した。すなわち, 学習順応性, 持久性, 将来の明確性, 進路選択の妥当性, 人間関係不全性, 劣等感, 気分不安定性, 過敏性である。

【結果】 研究1では「学業継続要因尺度」の検討として因子構造の確認, 内的整合性の検証, 妥当性の検証を行った。確認的因子分析においてはGFI=.952, AGFI=.942, CFI=.773, RMSEA=.034, AIC=1504.310と一定の適合が示された。内的整合性の検証では $\alpha = .70 \sim .83$ を示し概ね高い信頼性が, 妥当性の検証では使用尺度と関連が見込まれる他の尺度との間に有意な相関があり併存的妥当性が認められた。

研究2では在学者と退学者の検討を行った。はじめに, 在籍状況(在学, 退学)と性別(男子, 女子)の2要因分散分析を実施した。その結果, 8因子において在学者が退学者と比べて有意に高かったのは学習順応性, 持久性, 将来の明確性, 進路選択の妥当性, 劣等感であり, 在学者が退学者と比べて有意に低かったのは, 気分不安定性であった。女子が男子に比べて有意に高かったのは劣等感, 気分不安定性, 過敏性であり, 女子が男子に比べて有意に低かったのは将来の明確性であった。

次に在学に影響を与える要因を究明するための判別分析を行った。その結果, 在学に正の影響を与える要因として劣等感, 将来の明確性, 学習順応性が示され, 負の影響を与える要因として, 気分不安定性, 持久性, 進路選択の妥当性が示された。尚, 判別的中率は59.9%であった。

最後に退学者の特徴を知るために退学者群のクラスター分析を行った。その結果, 低評価多数群(n=403) 高評価多数群(n=147), 混合群(n=216)の3つのタイプに分かれた。

【考察】 このように本研究では, これまで大学を中心に行われてきた高等教育機関における退学研究, 学校適応研究を専門学校領域に展開した。その結果, 専門学校における学業継続に関与する要因は学習順応性, 持久性, 将来の明確性, 進路選択の妥当性, 劣等感, 気分不安定性であることを明らかにした。また, 各要因が在学に与える影響度として在学に正の影響を与える要因は劣等感, 学習順応性, 将来の明確性であり, 負の影響を与える要因は, 気分不安定性, 進路選択の妥当性, 持久性であることの示唆を得た。使用した「学業継続要因尺度」の判別的中率は59.9%であった。このことから専門学校における学業継続に関する要因と中途退学者について約6割を本モデルによって説明ができるものとする。